

雨に降られて

長沙（チャンシヤ）站を出て、さっそく地図（二元）を買い、昼飯に快餐（一・五元）を食べた。

ガイドブックに安宿として紹介されている長島飯店は、長沙站から五一東路を一〇分ほど歩いたところにあった。フロントでチェックインしたいということを告げると、あっけなく、

「日本人は泊れません」

と断わられた。隣の外国人用のホテルへ行くようにと紹介される。

仕方がないので、言われたままに長島飯店隣の芙蓉賓館を覗いてみる。芙蓉賓館は入口前に駐車場のある堂々としたホテルで、フロントで尋ねると、一泊二〇二元。蘇州の南林飯店以来の高値だった。しかし他に安宿の目当てはないし、武漢、岳陽と安宿だったので、たまには高級ホテルに泊まって、バスにゆつくりとつかるのも悪くはないかなと思って、チェックインした。

ホテル代を支払ってしまうと、人民元がほとんどなくなってしまったので、ホテルの銀行で一万円を両替。

しばらく部屋で休憩したあと、湖南省博物館へ行ってみようと思つて、ホテルを出た。

歩道に一步を踏み出して、長沙のメインストリート、五一路を歩き始めると、すぐに数人の中国人たちが声をかけながら追いかけてきた。最初は何のことか分からなかったので無視していたが、しつこく食いきがってくる女性の言葉を聞いていて、チェンジマネーだということに思い当たる。

ちやうど人民幣がなくなつたところだったので、その女性の言うままのレートで二〇〇元（FEC）を二五〇元（人民幣）と交換。

それを見て、いったんあきらめた男が再び追いかけてきて、この男は、一〇〇元（FEC）で一四〇元（人民幣）だと言いながら、交換してくれと食いきがってくる。交換レートがずいぶん違うので、損をしたのか得をしたのか分からなくなりつつも、一〇〇元を交換した。

いっぺんに人民幣が四〇〇元近くも手に入ってしまったのだった。

五一路を西方、省政府の方にしばらく歩いてみると、大通りは立体交差になっていて、歩道はその高架下を抜けるようになってる。そこにもまた、いるわいるわ、手書きのプレートに『美元、日元、香元、外幣（アメリカドル、日本円、香港ドル、FEC）』などと記して、客待ちをする闇両替屋たち。

すでに十分なほど人民幣を手に入れてしまったので、僕にはもう用は

なかつたけれども、この閩両替屋たちを通じて両替をするのはいいのだのような人々なのだろうか、と不思議に思った。この長沙の街を訪れる外国人観光客の数は知れているだろうし、とても閩両替屋たちの暮らしを支えるほどの取引はできないだろうと思われる。たぶん彼らの客は外国人の観光客だけではなくて、開放経済の進展にもなつて都会の中国人たちの暮らしの裏側には外貨やFECがかなり浸透していて、だからこそ閩両替という商売もまた成立するのだろうと思う。

それにしても人目につくプレートなどを掲げて、なかば公然と閩両替が行われているというのはちよつとした駕きだった。他の都市では閩両替は『耳打ち』という非合法色の強い誘いかけだったのに。

開放経済はおそらくその根底から共産党支配を脅かすことになるだろうと、僕は思う。中国共産党は心臓(政治)をわしづかみにすることによつて社会主義開放経済という両刃の剣を統制しようとするのだけれども、末端の循環は必ず心臓に行き着かざるをえない。文化、情報の循環は経済の循環と切断して統制することはできない。たびたび噂されているFECの廃止、それは社会主義開放経済が国際的な資本主義経済に最終的にリンクされるということを意味するのだが、二重経済の防波堤を取り払ったとき、共産党支配が今のまま持続するとは誰も言うことはできない。そしてこのような国際経済とのリンクは合弁、合作という統制された形態の末端で、閩両替屋の繁殖という形で始まっているのだ。

五一路を三〇分ほど歩いて、湖南省政府前から路線バスに乗って、湖南省博物館へ。

ここは馬王堆漢墓から発掘された出土品とともに軫侯夫人の遺体が展示されていることで有名な博物館だ。

馬王堆は長沙市郊外にある古墳や、長らく五代後唐や楚王馬殷(八五二―一九三〇年)の墓であると信じられていたことから、馬王堆と呼ばれていた。最近(一九七二―一九七四年)の発掘で、実は馬王堆は今から二〇〇〇年以上も前、前漢の長沙国の丞相、軫侯利倉(BC一九三一―一八六年在位)とその妻子の墓であるということが明らかになった。(軫侯利倉という人は、ミャオ族の部落の首領であった可能性が高い、とも言われている。)

一五元の参観券を買って入館すると、館内には馬王堆における発掘を記録した写真や様々な出土品が展示されていた。漆器や陶器、あるいは織物、木簡などの出土品はとも二〇〇〇年前のものとは思えない立派なものだった。

ひととおりの出土品を見終わったあと、参観順路に従って地下室へと下

りていく、地下室を出入りする人々は言葉少なく、またかたずをのむような緊張が感じられた。

地下室の内部には四角く手すりが張り渡されて、そこから下方を覗き見ると、ガラス越しに軟侯夫人の遺体が静かに横たわっていた。発掘されたとき、遺体の四肢が動かせるほど保存状態が良かったといわれる夫人の遺体は、今彼女の遺体を覗き込んでいる僕と彼女とのあいだには二〇〇〇年の隔たりがあるのだということ、にわかには信じがたい気持ちにさせる。

二〇〇〇年の沈黙、と僕は言葉を置いてみる。

もちろんそれは軟侯夫人の遺体という実体のことではない。彼女と僕とのあいだにはそれこそ無数の彼女が羅列しているのだ。彼女の以前にも、そして僕の以降にも。

ひとつひとつの遺体(あるいは生)は映画のひとつコマのようなものなのかもしれない。そのひとつコマの平面を僕たちはあくせくとそれぞれの切実性の方位に従って生きているのかもしれない。そのような生が羅列されて、人類というひとつの物語がつむぎだされる。

逆にまた物語を構築することによって、ひとつコマの切実性になんらかの根拠を与えること。科学や神という、物語を俯瞰する視線。

だが、ついに死は「無念」を逃れることはできないのではないか。死はつねに「思いを残」し、お悔やみは遺族に送られるものである以上に、他ならない死者の「悔み」に答え、送られるものではないか。人類という物語は死者の「無念」をなだめることはできない。生は映画のひとつコマとしてあらかじめ約束され、封じられているものでは決していない。

もしも生が映画のひとつコマにすぎないものならば、軟侯夫人と僕とは地続きの連続性に埋め込まれることになる。そこには神聖はない。あるとすれば大きな物語、神の神聖なのだが、軟侯夫人の遺体は決してそのような神聖を僕に語りはしない。それはむしろ映画のひとつコマとして歴史に回収されることを拒絶する、生の一回性、その切実性、特異性なのだ。

二〇〇〇年の沈黙、と僕はもう一度言葉を置いてみる。それは絶対的な隔絶であり、隔絶であることを知ることなしには架橋はありえないのだ。三億円近くの巨費を投じて建設されたという博物館の新館を出て、小型の体育館という印象の建物へと入っていく。そこには軟侯利倉とその妻子が埋葬されていた巨大で頑丈な棺桶が、発掘現場を再現するようにして展示されていた。

巨大な、木製のタイムマシン…。

だが、二〇〇〇年の時を越えて僕たちが今日撃するのは、沈黙なのだ。

僕は歩いた。省博物館と隣あつて広がっている烈士公園へと。厚い雲に覆われた長沙市にはすでに夕暮れが兆していた。ぽつりぽつりと行き交う人々の他には、長い石階段を掃除する服務員のおばさんがいるだけ。

緑の木立は深い陰影を形作っていた。色とりどりの花は静かに咲き誇り、烈士記念塔は無言。塔内への門はすでに閉ざされていた。

烈士記念塔から石階段と石畳の道を下りていくと、前方には静かに湖の湖面が広がっていた。杭州の西湖や武漢の東湖のような印象。ただ少し小形で対岸の木立や丸い石碑もはつきりと見て取ることができる。湖岸に腰を下ろして、湖南（煙草）を一服。微かな物思いが情景を滑っていた。

ふと、雨粒が頬に触れた。

烈士公園内をバス通りの方へ、ゆつくりと歩き始めた。ときおり感じられた雨粒はまたたく間に夕立のような雨になった。石畳の長い道を三々五々人々は駆け足で公園の出口の方へ急ぐ。その間にも雨は強くなり、雨宿りの場所を求めて僕は木立の下へ入っていった。

うっそうとした木立はしばらくは雨宿りに役立ったが、さらに強く降りしきる雨には耐えられない。仕方なく烈士公園の門まで走り、チケット売場の小さな軒下で雨をしのいだ。そこには先客の中国人たちが数人肩を寄せあつていて、降りしきる雨に視線を漂わせていた。

目前の迎賓路を水しぶきを上げながらバスや自動車が通り過ぎていく。用意良く南ガツパを被つて、自転車で走り抜けていく人たち。ある者はずぶ濡れになってランニングシャツをべちゃりと皮膚にくっつけるようにして走り抜けていく。道路のように濡れねずみになるのも構わないまま小走りで歩きつづける男。

三〇分ほど、そこで雨宿りをしていたらどうか。小止みになりかけたかと思うと雨は再び強くなり、僕は雨の街に飛び出していきっかけをつかめない。一緒に雨宿りをしていた人たちは、ひとりふたりとどこかへ去っていった。

見ず知らずの街の片隅で、降りしきる雨に閉ざされて、僕はぽつんと立ちすくんでいた。確かにホテルには快適な空間が確保されているのだけれども、その路線も確かには分からないバスを乗りついで帰っていくことを考えると、まるでひとり置き去りにされたかのようなだった。だが、感傷をつむぎ、それにひたつているときではない。感傷の縁に立ち止まり、つねにそれを飛び越すのだ。つねに感傷を越境すること。

思い切つて雨の街に出ていった。大通りの並木から並木へと飛び移るようにしてバス停を求めたが、地図を読みまちがえて、あえなく逆戻り。ようやくバス停を発見するが、バス停には屋根がない。

折よく見つけた小食堂に大鍋が湯気をたてていたので入っていった。大鍋を指差しながら注文すると、出てきたのは細面のうどん(?)だった。雨に濡れて寒かったし、とてもおいしかった。食べ終わって、二元を差し出して勘定する。中学生のような年格好の女の子は少し不思議そうな顔をして、二元を受け取り、それから一元七角のおつりを返した。(表の料金表を見て、一元数角だと思ったのだが、値段は三角だったのだ。)

満員のバスに乗り込み、省政府前へ。バスを乗り換えて芙蓉賓館へと戻った。

ホテルの部屋で、岳陽の市場で買ったパイナップルを食べた。物足りないので軽く飯を食べようと思ってホテルの近所をうろついたが、雨上がりの長沙の街はひっそりとして、付近には食堂がなかった。仕方ないので我慢することにして、たまたま見つけた雑貨屋で白沙ビールと湖南と石験(全部で七元強)を買い込んで、ホテルに戻った。

バスにお湯を満たして何日かぶりの風呂に入る。風呂上がりに、冷えてはいないけれども白沙ビール。テレビでは体操の選手権らしき番組をやっている。なんてぜいたくなんだろう。

口数少なく、長沙の夜が更けていく。

そとはまた、雨。